

[研究ノート]

インドとアメリカと死生学

India, USA and Thanatology

竹内 啓二

Keiji Takeuchi

キーワード：インド、ベンガル、タゴール、ブランモ協会、アメリカ、ホスピス、死生学、アメリカとインドの社会と文化の比較

はじめに

本稿は、「経済学基礎演習（国際社会コース）」のテキストに組み込まれる講義内容として執筆したものである。「経済学基礎演習（国際社会コース）」は複数の教員が、それぞれ3回ずつ講義を担当して構成している授業である。

本講義は、3回の授業を次のように分けて展開する。第1回は、担当教員のインド留学体験をもとに、現代のインドの状況にも触れながら、インドについて講義する。第2回は、担当教員のアメリカ留学体験をもとに、インドとの比較の視点を入れながら、アメリカについて講義する。第3回は、死生学、特にその教育における展開ともいえる、生と死の教育という側面から、学生に生と死にかかわる問題についてグループ・ディスカッションをさせて、関心を高める。

本稿においては、主に第2回までの授業の内容を取り扱っている。

I インド

1 インドの留学先と目的

私はインド、西ベンガル州にあるインド国立タゴール国際大学（Visva-Bharati University, Santiniketan シャンティニケトン）に1981年～84年の3年間留学した。同大学の博士課程哲学・比較宗教研究科に在籍した。博士論文のテーマは、近代インド思想の研究、特にブランモ協会の創設者ラムモホン・ライとデベンドロナト・タゴールの生涯と思想であった。博士論文をもとにまとめたものが拙著『近代インド思想の源流——ラムモホン・ライの宗教・社会改革』（新評論）である。留学中は、ベンガル語を学び、ベンガル語と英語の文献を読み、英語で博士論文を書きあげた。

—1 ベンガル語

ベンガル語は、インドの西ベンガル州（コルカタ（旧名カルカッタ）が州都）の公用語であるとともにバングラデシュ人民共和国の国語でもある。母語人口は、インド、バングラデシュをあわせて1億7000万人を超えると言われている（町田和彦・丹羽京子著『エクスプレス ベンガル語』白水社、1990年、p. 3）。

—2 ラムモホン・ライ（Rammohan Ray 1774～1833）は、語学の天才で、西洋思想と世界の諸宗教を原語で理解しようとした。最初はキリスト教宣教師と一緒に、未亡人が亡くなった夫の遺体を燃やす火の中に飛び込んで死ぬというサティー（寡婦殉死）の慣習を禁止させようとする運動などを展開した。しかし、キリスト教宣教師と「三位一体思想」をめぐる対立した。キリスト教宣教師たちは、インドにキリスト教を広めるために、ヒンドゥー教を批判していったが、ラムモホン・ライからすると、父なる神、子なるイエス・キリスト、聖霊が一体であるとする三位一体の教理は、キリスト教宣教師たちが批判するヒンドゥー教の多神崇拝、偶像崇拝と同じものであった。ライの創設したブランモ協会では、唯一で無形、無属性の絶対神への信仰のみが真実の信仰であるとされた。ライは「近代インドの父」と称され、その後のインドの思想家、宗教家、社会改革者、政治家などに影響を及ぼした。

—3 デベンドロナト・タゴール（Devendronath Tagore 1817～1905）は、ブランモ協会の事務局長として、ラムモホンの死後、停滞していた協会の活動を活性化し、発展させた。彼の時代に、ブランモ教会は分裂し、彼の率いたブランモ教会は、「原ブランモ協会」と呼ばれ、社会的問題よりは、霊的・宗教的特色を強く打ち出した。彼の息子の一人が、後に述べるロビンドロナト・タゴールである。

2 インドでの留学生活

—1 住まい

タゴール国際大学は国立大学であり、私が留学した当時の学長はインディラ・ガンディー首相であった。授業料も寮費も非常に安かった。私は留学生のための国際寮（International Guest House）に入らせていただいた。ベッドが二つ置いてある、天井に大きな扇風機のついた部屋とシャワーとトイレが一緒になった部屋があり、それに洗濯物などを干すことができるベランダがついていた。当時は、エアコンは一般の家庭にも行き渡ってなく、大きな扇風機を回すことが暑さをやわらげる方法であった。ベッドには蚊帳をつるせるように支柱がつけられている。蚊が媒介するマラリヤなどの病気があるので、蚊に刺されないようにする必要がある。

—2 食事

朝は食パンを食べた。パンは「ルティー」と言い、学園内の屋台の食料品売りや頭にパンを入れた籠を乗せて売り歩いているパン売りから買った。

昼はアルミでできた円筒形の重箱式の弁当箱に入って届けられるお弁当をとった。ジャガイモ、その他の野菜、ゆで卵、川魚のカレーと、ダルと言う豆を使ったスープ（日本の味噌汁にあたる感じ）、ご飯とチャパティ（全粉粉と水を捏ねて生

地を作り発酵させずに薄く円形にのぼして焼いたもの) などがメニューであった。夕食は野菜の料理がほとんどであったが、自炊をした。日本の実家から送ってもらった、味噌や醤油、梅干その他の日本の食品はありがたかった。一般に肉食は行われていなかった。肉は庶民にとっては値段が高い上に、200グラムといった形で計り売りはしていなかった。タゴール国際大学の近辺には肉屋もあまりなかった。ある程度収入のある家でお客さんがある時などに、鶏を一羽買ってきてつぶしてチキンカレーを出すなどというくらいであった。なお、ベンガル人は、川魚を好む。川魚のカレーなどはチキンカレーより安い。

調理のためにケロシン・ストーブを使った。日本ではよく登山やキャンプなどに持っていった。

—3 停電

毎日、特に夕方に2時間ぐらい停電した。料理などに人々が一斉に電気を使うためであろう。ろうそくとランプは必需品であった。現在でも大都市においても停電がある。需要に供給が追いついていないのである。

インドはインフラ整備が遅れているといわれるが、そのなかでもとくに電力供給は深刻な問題である。インドの電力供給はピーク時で需要を9.1%も下回っている。漏電や盗電によって、電力の三割が消費者に届いていない。供給される電力の質も悪く、不安定な電圧は工場の機械の寿命を縮めている。経済発展に見合っただけの電力供給をおこなうために、発電設備を2020年までに現在の3倍近い30万メガワットに引き上げる必要があるとされているが、その実現は容易ではない。こうした状況を乗り切るために期待されているのが民間部門の役割である(近藤正規「インフラ整備は民間資本の手で」広瀬崇子・近藤正規・井上恭子・南埜猛編著『現代インドを知るための60章』明石書店、2007年、p. 155)。

—4 気候

ベンガル地方では季節は4季ではなく、6季である。しかし、実際には雨季と乾季、その境目くらいしかわからない。

春：ボショントカール　　夏：グリッショカール　　雨季：ボルシャカール
秋：ショモットカール　　冬：シトゥカール　　霜季：ヘモントカール

夏(4月末から6月半ば)は、戸外では空気は暑くサウナに入ったようである。6月半ばから9月半ばごろまでの雨季(ボルシャカール)であり、毎日、シャワーのような雨が降ったりやんだりする。雨季が終わると、雨は降らない乾季となる。12月ころは冬ではあるが、日本人にはそれほど寒くは感じないが、ベンガル人にとっては寒く感じるようで、セーターを着たり、ショールを羽織ったりしている。

—5 コルカタ(カルカッタ)

コルカタに月に一度は行った。華僑も住み、中華料理店もいくつかあるので、普段は食べられなかった中華料理を食べることは楽しみであった。コルカタは460万人以上の人口(大都市圏人口では約1500万人)を抱える。イギリス植民地支配の政治的拠点であり、英領インドの首都であった。路上で寝起きし暮している路上生活者が多く見られる。スラムもある。

インドの中でも、人間が走って引く人力車があるのはコルカタのみであろう。ちなみに地方のちょっとした町には、三輪自転車の後ろに二人は腰掛けられる座席をとりつけたものが「リキシャー」として活躍している。コルカタで「リキシャー」引きをしているのは、多くは農村部から出てきてこの仕事をしている。

—6 マザー・テレサの修道会

コルカタには、マザー・テレサの修道会があり、路上で死を迎えようとする人を受け入れ、看取る「死を待つ人の家」、孤児院、高齢者と精神病患者の施設、ハンセン病患者の施設がある。私は留学以後の渡印時に、高齢者と精神病患者の施設「プレムダン」で2回ほどボランティアとして奉仕させていただいた。早朝にマザーの修道会に行き、朝の礼拝に参加させていただいた時、マザー・テレサが頭にお手をしておいてくださり祝福して下さった。世界各地からボランティアをするために来ている。

—7 ベンガル仏教協会

コルカタには仏教徒がいる。もともとはバングラデシュから移住してきた人が多いようである。バングラデシュには今も仏教徒がいる。スリランカと同様に上座部仏教の仏教徒であり、僧侶は厳しい戒律を守っている。妻帯せず、食事も昼食までで夕食はとらない。ベンガル仏教協会は、コルカタの中心部にあり、小学校も経営している。この協会はいわばお寺でもあり、僧侶が何人かいる。ご本尊としてブツダの像が安置されている。私はコルカタに行ったときは、この協会の宿泊施設に泊めていただいた。

—8 ロビンドロナト・タゴールとタゴール国際大学

ロビンドロナト・タゴール (Rabindranath Tagore 1861~1941) は、アジアで初めてノーベル文学賞を受賞 (1913) した文学者、思想家、教育者、音楽家、画家、農村改革者である。タゴールは多様な活動をしたが、第一義的には、生存中に世界各国に受け入れられた世界詩人である。タゴールは日本にも幾度か訪れ、日本人の美的感覚を賛美したが、日本軍の中国への軍事的侵攻については非難した。このころの大きな歴史的出来事をあげると、1914年に第一次世界大戦が始まり、1930年にガンディーが不服従運動を開始し、1939年に第二次世界大戦が始まった。ちなみに廣池千九郎は1866年に生まれ1938年に亡くなっているため、タゴールと同時代人である。

タゴール国際大学は全人教育を目指している。幼稚園から大学院まであり、教師も学園内か近隣に住んでいる。学生は多くが寮に入っている。仏教、インド学、中国学、チベット学、美術工芸部、音楽舞踊部 (特にインドの音楽舞踊)、日本語・中国語を含む様々な言語のコースがある。

経済学部、教育学部、自然科学・コンピューターを学ぶ学部もある。コルカタから北方に鉄道で2時間ほど (80年代初頭には4時間かかった) のボルプールという駅が最寄駅である。学園の周囲は平野で、農村が点在している。

タゴール国際大学は、通称シャンティニケトン (平和の里) と呼ばれ、木々や草花がたくさんあり、教師も園内や近隣に住み、まさに全人教育が行われている。生

徒・学生は、教師を名前の後にお兄さん（ダー）、お姉さん（ディー）をつけて呼ぶ。インドの古代からの伝統である自然の中での教育を受け継いでいると思われるが、小学生などはマンゴーの木の下で、地面に風呂敷大の敷物を敷き、戸外での授業を受ける。私も、小学2年生のベンガル語の野外のクラスに出席させてもらったが、同級生たちから「けいじダー」と呼ばれたり、「ショントス（満足）ダー」という愛称をつけてくれる子がいたりして、楽しい時間であった。1年の間にさまざまな催しがあり、その際には、タゴールの作詞・作曲した歌（ロビンドロ・ショングット）が歌われ、タゴールの創作した踊りが踊られたり、劇が上演される。時には、有名な音楽家の演奏会があり、ある時は野外で、夜通しのインド古典音楽の演奏を聴く催しもあった。私自身、音楽学部の修士課程の学生にロビンドロ・ショングットを教わった。「国際交流の夕べの」といった催しがあり、阿波踊りを披露したり、詩吟を吟じたりしたこともあった。インドでの留学生活は不便な面もあったが、休暇にはインド各地を旅行し、苦労の中にも楽しいこともあり、学ぶことの多い3年間であった。

3 インドの特色

—1 多言語国家

ある調査によると、179の言語と544の方言があるという。それらの言語は、北インドで使われているインド・アーリア語系、南インドで使われているドラヴィダ語系に分けられる。そのなかでヒンディー語が連邦公用語、そして準公用語として英語が用いられている。1956年に言語を基礎とする州再編成が行われ、いわゆる言語州が誕生し、行政単位の基礎となっている。

インドの紙幣には、英語の他、アッサム語、ベンガル語、グジャラティー語、カンナダ語、カシミリー語、マラーヤラム語、マラーティー語、オリヤー語、パンジャブ語、サンスクリット語、タミル語、テルグ語、ウルドゥー語、ヒンディー語の順にそれぞれの文字で金額が表示されている。

—2 インドの経済成長

1991年から経済自由化を開始した。人口10億を超えるインドの貧困層は3億人だが、家電、乗用車などが買える中産階級も約3億人いる。IT産業を中心に急成長してきた。04年の実質GDP成長率は、インドは7.1%（日本は2.7%、米国4.4%、中国9.5%、EU1.7%）。台頭するBRICs（ブラジル、ロシア、インド、中国）のなかでも中国につぐ高い経済成長をしてきている。中国とインドが手を組めば脅威になるという論調も出てきている。

—3 貧富の格差

貧困層の大部分を占めるのは、農村の貧困者である。人口の7割が農村に居住していることに加え、人口に占める貧困者の割合が、農村部では都市部より高いからである。農村部の貧困者の中核をなすのは、農地を十分持たず他人の農地で賃金労働者として働く農業労働者や小作農家であるが、零細農家や、リキシャー引きや小商売、農村工業など農村雑業に従事している人も多い。

インドの貧困の最大の原因は、経済発展の遅れによる雇用機会の少なさや所得水準の低さである。また、貧困者が自らの環境を改善し、環境の変化をチャンスに変えていく——アマルティア・センがいうところの——潜在能力（ケイパビリティ）の不足、あるいはその潜在能力を活かす社会的な条件が整っていないことにある（須田敏彦「依然として深刻な貧困問題」『現代インドを知るための60章』pp. 170-172）。

アカデミー賞受賞の映画「スラムドッグ\$ミリオンネア」は、大都市ムンバイのスラムに育った少年が主人公である。

—4 民主主義

インドは民主政治をおこなう国で最大の人口を有する。しかし、貧困や社会格差の問題は解決できていない。貧困層は生活改善の要求を政府にどうして突きつけなかったのか。それはインドの社会構造に起因する。インド社会は言語、宗教、カーストによって分断されている。国民は時には宗教、時にはカースト、時には言語に基づくアイデンティティを強く意識する。人々は経済政策での論争を起こすよりも、自らが属するカーストや宗教集団の利益を優先させる投票行動をとってきた。また、政党もカーストや宗教、地域などを基礎に色分けが進んだ（広瀬崇子「騒がしい民主主義」『現代インドを知るための60章』pp. 21-22）。

—5 カースト制度

カーストはインドでは「生まれ」を意味するジャーティという語で呼ばれている。そのジャーティの数は、全体で2000~3000にも及ぶとされている。独立後のインドでは、「指定カースト」、「指定部族」、「その他後進諸階級」を設定し、社会的・経済的・教育的弱者として保護政策が採られてきた。各カーストは、固有の職種と結びつき、特定の地域的分布を示し、カースト集団内での通婚関係（カースト内婚）を維持している。さらに、カースト間には、上下の階層的秩序がある（『現代インドを知るための60章』p. 34, p. 188）。

—6 インドというと、神秘の国、カレー、ヨーガ、貧困などの言葉が連想されるかもしれない。

仏教がインドに生まれたことで、日本からすると、日本の文化の源流のような面もある。ヒンドゥー教の神々は、仏・菩薩を守護する神々（帝釈天、毘沙門天、弁財天、吉祥天など）として、日本でも信仰されている。ヒンドゥー教で大河や高山、大木などを神格化して信仰するのは、神道にも似ている。一方、北インドの言語は、インド・ヨーロッパ語族に属し、ヨーロッパやイランなどの中東と共通するような側面もある。古い歴史をもち、その文化的な蓄積は豊かである。アジアで初めてノーベル賞を受賞したのがロビンドロナト・タゴールであり、ノーベル経済学賞もアマルティア・センが受賞している。ガンディーのような優れた政治家であり聖者である偉人も出ている。宗教が生活の中に生きているが、同時に経済的にも発展していて、中国とともに世界の中でも大きな地位を占めてきている。インドは核保有国でもある。今後、ますます、経済的・政治的にも文化的にも日印の交流は盛んになるであろう。

II アメリカ

アメリカのワシントン DC にあるジョージタウン大学 (Georgetown University) に 2002 年 8 月～2003 年 8 月の 1 年間、研究留学をした。

1 アメリカでの留学生活

—1 最初の 2 ヶ月は、メリーランド州の Rockville にアパートの一室を借りる。大学まで電車とバスを乗り継いで通う。11 月より、大学近く (DC 内のジョージタウン近く) に引っ越す。地下室の部屋を借りる (家賃 800 ドル)。

—2 銃による無差別殺人事件

Rockville のアパートに住んでいた 10 月に、銃による無差別殺人事件が起きた。犯人が次々と首都圏のあちこちで銃で撃っては車で逃走するという事件であった。私自身のアパートの近くでも銃声らしき音が聞こえ、ヘリコプターが来て、警察が銃を構えて捜索するようすが自分の部屋から見えた。その夜、警察が聴き取りにやってくる。聞こえたのは銃声のようであったかどうかと聞かれた。誰かれかまわずスーパーの外で、駐車場で撃たれるという状況で、外出をできるだけ控えるようにした。犯人が捕まって、元兵士の黒人と 17 歳の少年ということがわかった。アメリカで生活し始めてすぐに、日本では考えられないようなこのような事件に出くわすことになった。

—3 食事

基本的に自炊をすることにした。外食でということになると、ファーストフードのチェーン店は別として、日本のように手ごろな値段で食事をする食堂はあまりなかった。スーパーマーケットには商品は豊富であった。自然食品を扱う Whole Foods Market もよく利用した。値段は高めだが、健康志向の人には人気がある。豆乳や脂肪分なしの牛乳なども売っていた。人々は週に一度くらい車で行って大量に買う。ミネラルウォーターなども大きな容器に入ったものを売っている。すでに洗ってあってそのまま食べることのできるサラダの袋入りなどもあった。支払いはデビットカード (Debit Card) で行うのが通常であった。デビットカードとは、商品購入時に銀行などの預金口座から即時 (あるいは数日後までに) 引き落としとして支払うクレジットカードに似たカードのことである。debit とは簿記用語で「借方」を意味する。日本でも 2000 年にはジェイデビット (J-Debit) というサービス名で本格的なデビットカードサービスが開始された。一般に買い物では現金はあまり使わない。クレジットカードかデビットカードを使って買い物をする。

—4 その他に日常生活で気がついたこと

洗濯ものを干さない。すべて乾燥機を使用する。ゴミの分類はほとんどなかった。アパートは冷暖房完備。テレビは無料放送のテレビ局チャンネル以外に、ケーブルテレビ局のチャンネルがたくさんあった。日本の番組も見られるチャンネルもあった。

テレビでよく見ていたのが、PBS の番組である。PBS はアメリカの非営利・公

共放送である。主に教育番組・教養番組の放送をしている。よく知られている「セサミストリート」の製作局である。日本でも、ジム・レーラーニュースアワーが、NHK 衛星第一テレビで、火～金曜日の午後2時15分～3時に、放送通訳を付けたものが放送されている。また、インターネットでは、その公式サイト Online NewsHour で2000年以降の放送の動画や音声ファイル・スクリプトを蓄積・公開している。学生に推奨したいサイトである。

—5 ジョージタウン大学とケネディ倫理研究所

1789年創立のアメリカで最初のカトリックの大学（イエズス会）。クリントン大統領が卒業した大学である。この大学のケネディ倫理研究所（Kennedy Institute of Ethics）で客員研究員となる。ケネディ倫理研究所は1971年に設立された生命倫理の研究の世界における中心的機関である。この研究所とその図書館は生命倫理・医療倫理に関して研究し学ぶ人、政策を議論する人に資料や議論の場を提供している。被験者の保護、生殖、フェミニスト倫理、終末期ケア、保健政策における正義、知的障害、クローニング、遺伝子治療、優生学等のバイオエシックス（生命倫理）に関する主要な問題を研究し、教え、政策の作成に従事する人たちのセンターである。私は「終末期医療における生命倫理」について研究した。

私の関心をもっているテーマは、デス・エデュケーション（生と死の教育）、ケアの倫理、ホスピスの思想と実践、そしてそれらを含む、生と死についての学際的学問である死生学（Thanatology）である。私は、水野治太郎麗澤大学名誉教授が1993年に設立された「千葉県東葛地区・生と死を考える会」の事務局長を10年近く務めているが、水野名誉教授の研究と実践そしてこの会の様々な活動から、多くの示唆を得ている。この会の活動については会のホームページを参照されたい。

—6 ホームレスや貧しい人のためのボランティア活動

土、日などに様々なボランティア活動に参加した。ジョージタウン大学には、大学生が行うボランティア活動の団体 Hoya Outreach Programs and Education (HOPE) があった。そのホームページによると1999年にある学部1年生が設立したとのことである。長い期間というだけでなく、ワシントン市内のホームレスに学生が奉仕する機会を提供したいというのが目的である。私が参加した活動の一つは、新鮮な野菜を手に入れることが難しい貧しい人たちのために野菜を作って供給するための野菜畑での一日作業であった。また、ホームレスや貧困層の人たちに食事を配給のための料理の下ごしらえの手伝いもした。それは七面鳥の肉を大量に切る作業であった。また、麻薬やアルコール依存症の人のためにいっしょに夕食をつくり食事をしながら話をするという活動もした。車で市内を回って、ホームレスに食物やスープを配ることもした。

—7 ホスピスでのボランティア

自分の研究のテーマとも深く関わるホスピスでのボランティアを行うことができた。2003年の6月末から8月末まで2ヶ月間、The Hospices of the National Capital Region（首都圏ホスピス）のホスピス・センターで、週に一度のボランティアをさせてもらった。The Hospices of the National Capital Region（首都圏ホスピ

ス) は、1977年に始まったバージニア州北部ホスピスを中心として、1998年にワシントン DC のホスピス、2000年にメリーランド州のホスピスなどと合併して、首都圏の地域をカバーするホスピスとなっている。現在、名称が、Capital Hospice と変わっている。2002年には、毎日平均約 650 人、年間 4200 人以上の患者さんをケアしていた。従業員は、500 人であった。

2002年のデータによれば、46%ががん患者、23%が老人ホーム (nursing homes) に入っている方、9%がアジア系、17%が黒人、2%がラテンアメリカ系 (ヒスパニック) であった。ホスピス・ケアを受けた期間の中央値は、17.5 日ということである。

基本的には、在宅ホスピス・ケアであるが、急に容態が悪化した患者さん、痛みの激しい患者さんの入院や、介護する家族を休ませるための入院を受け入れるホスピス・センター (施設としてのホスピス) がある。私は、そこで、ボランティアをさせてもらった。患者さんの夕食のお世話から始めて、オムツの交換、車椅子を押してあげての散歩、話し相手など、看護助手や看護師さんの指示に従って行った。

2 日米のホスピスの比較とホスピス・ケアの将来像——服部洋一著『米国ホスピスのすべて』から

(1) 米国ホスピスの特色

服部洋一著・黒田輝政監修『米国ホスピスのすべて——訪問ケアの新しいアプローチ』(ミネルヴァ書房、2003年、pp. 172-174)によると、米国ホスピスは、在宅中心のケアのスタイル、患者やその家族の自立を支援する教育的アプローチをとっているが、それは経済が作る枠組みから生まれたものだ。米国では、病人・家族は、ホスピスに、直接には報酬を払わない仕組みになっている。ケアに要する費用のすべては、メディケアがホスピスに給付するお金で賄われる。

メディケアとは、公的医療保険制度で、65歳以上の人が受給できる。また、重い病気などを理由に、継続して24ヶ月以上、傷害年金給付の受給資格を持つ人は、65歳未満であっても受給を申請できる。給付金額は、実際のサービス内容によらず、ケアの場所と状況だけで決定される (服部、p. 162)。

米国ホスピスの教育は、実践的なものである。壇上に立つ教師の行うものではなく、子供に言葉を教える親の役割に近い。主役である病人と家族を支え、「病人と家族だけでできること」の周りに、「専門職が手を貸すことができること」という、可能性の領域を広げる。ホスピスは、一歩離れて見守りながら、必要に応じて支えの手を伸ばす。

ホスピスにおける教育は、学校的なトップダウン式のものではない。それは、病人・家族と同じ高さに立って行う、双方向的なコミュニケーションである。スタッフは教えながら学ぶのである (服部、pp. 187-197)。

(2) ホスピス・ケアの将来像 (服部、pp. 199-206 より)

服部によると、ホスピス・ケアには以下のような二つの基本的方向性がある。

—1 ケアに関する二つの基本的方向性

① 「向上モデル」

第一の方向性は、できるだけ高度なケアを目指し、専門職が、知識と技術をどんどん洗練していくものである。これを服部は、「向上モデル」と呼ぶ。

「向上モデル」に適したかたちは、専門施設での入院型ケアである。緩和ケア病棟を中心とするわが国の状況は、このモデルによく当てはまる。

② 「教育モデル」

専門職と一般市民の知識・技術差を縮め、後者のケアにおける自立を支えることを目指す。服部は、米国ホスピスに典型的なこの方向性を、「教育モデル」と呼ぶ。

病人と家族が、ケアを理解し、そのなかに自分をしっかり巻き込んでいくことは、実り多いコミュニケーションの可能性を拓く。

ホスピスの側も、介護力をフルに活用し、過剰な介入を省くことで、コストを抑制することができる。このモデルに適したケアの提供形態は、在宅ケアである。

(3) 日本の目指すべき方向

服部は、「向上モデル」が目指すケアは、どうしても大きな費用がかかるとする。それがプログラム数で日本が米国に水をあけられた原因のひとつである。

教育モデルへと舵を切るためには、従来の考え方や、ケアのシステムそのものを、根本的に変革するために大きなエネルギーが必要である。職人的に知識・技術を磨いてきた専門職には、考えを180度回転させる、意識革命が求められる。教育モデル下では、人当たりのよいコミュニケーションの技術、訪問先で臨機応変に対処できる判断力など、全く別の資質が要求される。

また、組織の次元でも、教育を目標として共有し、その理念を織り込みながら、プログラム全体を再編する作業が必要になる。

在宅ケアを拡大するための、モノと人のネットワークの整備、公的保障制度のさらなる充実も大きな課題となるだろう。

さらに、ケアを受ける病人と家族にも、大きな意識変革が求められる。

専門職にすべて任せるとはならず、ケアに何を期待するか、具体的なイメージを持ち、そのために何ができるか、積極的に考えていく覚悟と責任を持たなくてはならない。

折衷モデルの可能性

もう一つの可能性として服部が提案するのは、向上モデルと教育モデルを、異なる場で実現させる、折衷モデルである。

具体的には、緩和ケア病棟の高度で管理の行き届いたケアを維持しつつ、自立を支援する在宅ホスピスを、質・量ともに拡充していく。

また、施設ケアと在宅ケアの中間的な性質を持つデイ・ケアも、積極的に模索していくべきである。

折衷モデルの最大の利点は、病人と家族に、選択の自由が与えられることだ。

入居型ケアを受けながらも、十分に安全だという保証があれば、本心では自宅でケアを受けたいと思っている病人は、数え切れないほどいるだろう。

一方、様々な理由から、ケアに積極的になれない家族がいる事実も認めなければならない。教育モデル中心の米国ホスピスでも、実際には、長期療養型施設に入居しながらケアを受ける病人は少なくない。

折衷モデルを念頭にわが国の状況を眺めると、在宅ケアのシステムが決定的に不足している。スタッフの育成、モノと人のネットワーク整備、公的保障制度の充実が急務だが、その際、人・家族の希望に応じて、入院ケア—在宅ケア間を自由に行き来できるように、包括的なシステムを目指すことが肝心である。

(4) 日本のホスピス・ケアの特徴

日本のホスピス・ケアの特徴を服部は以下のように整理している（服部、pp. 208-211より）。

① 医師・医療中心主義—福祉と分断されたホスピス

少数の先駆的医師によって導入、牽引されてきた。医師のリーダーシップ、施設型ケアの偏重など多くの面で、従来の病院医療をそのまま引き継いでいる。特に、福祉との分断を解決しない限り、本当の意味での全人的ケアの達成は難しいだろう。

② ケアの主導権の曖昧さ

病人が苦しむ姿を見かねて、家族が希望して入院するケースも多い。病人中心という基本理念は、わが国の実践のなかで、病人が意思決定の中心となることと、「病人のためになるケア」を行うことの、二通りの解釈の間を揺れている。

③ 経済的特徴

わが国の緩和ケア病棟は、恵まれた公的給付体制と差額ベッド料の徴収により、経済的にかなり豊かだ。この事実は、施設増加の誘因にもなっている。一方、在宅ホスピスの給付体制は、未だ十分に整っておらず、プログラム増加を妨げる一因となっている。病人と家族のニーズに柔軟に対応するためには、ケアの提供形態を問わない包括的な報酬制度をできるだけ確立する必要がある。

④ 基準の緩やかさ

米国のメディケアのように、ケアの内容を具体的に規定する、拘束力を持った基準はない。良い意味ではケアの自由度を高めているし、新規参入の間口拡大にもつながっているが、ケアの水準維持の問題がある。

⑤ 生活を提供するアプローチ

施設があり、経済的にも恵まれているわが国の緩和ケア病棟は、病人・家族に、生活そのものを提供することを目指している。これは、病人・家族の生活への干渉を、可能な限り小さくすることを目指す米国の在宅ホスピスのアプローチとは対照的である。

二つのアプローチには、それぞれ長所と問題がある。

大切なことは、わが国では現在主流のアプローチが唯一のかたちではないと知り、可能であれば別の選択肢を提供できる体制を整えておくことであろう、と服部は提言している。

3 アメリカの特色（インドとの比較）——留学体験から

—1 犯罪の多さ。ワシントン DC でも黒人の多く住む地域の貧困と治安の悪さ。人種、収入による住む場所の違い。

インドでは、貧しさゆえの盗みは、私の留学していた 1980 年代初頭でもあった。主食のお米まで盗まれた人があったと聞いたし、私自身は、自転車のサドルのみを盗まれたことがあった。

近年のインドでは、2008 年 11 月 26 日に起こった、イスラム過激派がムンバイのホテルを襲撃した同時多発テロ（約 170 名が死亡）のような、テロ事件がしばしば起こっている。また、経済発展にともなう貧富の格差の増大によって、発展の波から取り残された人々による犯罪も増えていると聞く。

—2 言語は英語だけではない。スペイン語。人種も多様。メキシコからの不法移民の問題。インドの多言語の状況は、前述のとおりである。人種も多様である。

—3 貧富の差。自由競争で、競争に勝った人は、豊かな暮らしを得るが、そうでない人は貧しい。ホームレスの問題。冬をどこですごすか。医療保険の問題。日本のように国民皆保険ではない。保険に入っていない人（約 4000 万人）の中には、病気が重くなってから救急センターに駆け込む人もいる。医療費の高さ。お金のある人は高度な医療を受けられる。

2009 年 10 月現在、オバマ大統領は、医療保険の改革を打ち出し、賛否両論が巻き起こっている。無保険者を減らす一方で、医療費の膨張を抑制し、未来の世代に財政赤字のツケを残さず、医療の質を高める、というオバマ大統領の主張が、幻想にすぎないのかどうか、見守りたい（『ニュース・ウィーク日本版オフィシャルサイト』、ロバート・サミュエルソン「オバマ医療「改革」の幻想」2009 年 8 月 21 日を参照）。

インドではカースト制度が、職業の選択や個人の成功の可能性を阻む面があるが、社会の安定には寄与している。カースト制度では職業は世襲である。例えば、コルカタの清掃業を担っているのは代々その職業を受け継いでいるカーストである。都市部では、カースト制度も農村部ほど厳しいものではない。

—4 銃による犯罪。1992 年に日本人の留学生、服部剛丈君（当時 16 歳）が銃で殺された事件は、アメリカの銃社会の実情を浮き彫りにした。2002 年 10 月、私が留学して 1 ヶ月たったころ、ワシントン DC とその周辺地域で起きた無差別連続射殺事件は前述したとおりである。

—5 アメリカは車社会であり、車をもっていないと何かと不便である。電車やバスのシステムが整っている首都圏では、車がなくても比較的便利であるが、食料品の買出しも週に一度、一週間分を買うのが一般的であり、そのためには車が必要となる。

ちなみに、2005 年で、世界で一番多く自動車を保有していた国は、アメリカで、

その台数は2億4100万台である。2位に日本がつけているが、7600万台であった。インドは中国とともに、自動車保有台数の増加率が世界でも抜きん出ている。2000年～2005年で、中国は21.2%、インドは17.8%であった。アメリカは1.7%、日本は0.8%であった(白石泰基=テクノアソシエイツ、「Erectro To Auto Forum」<http://e2a.jp/number/080227.shtml>より)。

アメリカはエネルギーを大量に使う社会である。暖房も日本のように自分のいる部屋だけストーブで暖めるという局所暖房ではなく、家全体を暖めるセントラル・ヒーティングであった。ゴミの分別などもおおざっぱであり、プラスチック、燃えるゴミ、燃えないゴミといった日本では一般的な分別はなく、すべていっしょに大きなゴミ入れに捨てる方式であった。

しかし、ワシントンDCには、広大な公園がいくつかあり、緑も多い。

インドは、近年の経済発展にともない、都市における環境問題の悪化は深刻である。車の排気ガス、木や牛糞などを燃料として燃やすため、それによって出る煙などで、コルカタなどの大都市では、空気が非常に汚れている。工場の排水や、上下水道の不備による水の汚染も問題である。私が80年代初頭に留学していたころは、田舎の方では、ゴミを捨てても、それを放し飼いの牛が食べにきたり、どこからともなく人がもっていき、業者などが回収する必要はないようであった。新聞紙は商品の包み紙や、お菓子の入れ物袋として再利用されていた。素焼きでできた紅茶を飲むカップは、電車の窓から捨てられても、そのまま土に帰るが、近年はプラスチックや紙のコップが使われているので、それらはゴミとなって散乱していたりする。

—6 アメリカではボランティアが盛ん。キリスト教の精神と政府に頼らない自主独立の精神が背景にある。「一人一人を大切にする」精神がそこにはある。ホスピス(hospice)でのボランティア、ダギーセンター(Dougy Center)=家族を亡くした子供をケアする団体、MADD(Mothers Against Drunk Driving)=飲酒運転に反対し、飲酒運転で亡くなったり怪我をした人をケアする団体、などの民間の団体の活動も盛んである。

インドでも非営利組織の活動は活発である。斉藤千宏編著『NGO 大国インド—悠久の国の市民ネットワーク事情』(明石書店、1997年)は、SEWA(自営女性労働者協会)、WWF(勤労女性フォーラム)などの女性のエンパワーメントに関係するNGOや、教育改革、環境・開発問題についての運動体である「民衆科学運動」などを紹介している。

—7 アメリカにおける飽食・肥満の問題：そのためにスポーツクラブ、ジョギング、健康志向の食品。最近のニュースでは、太っていても「かっぷくがよい」(full figure)として肯定的に見る人も増えてきているとのことである。学校おけるジャンク・フード、コーラなどの販売禁止の動向も報じられている。日本の伝統的食事は理想的である。寿司、豆腐など、健康志向の米国人には人気が出てきている。

グレッグ・クライツァー著、竹迫仁子訳『デブの帝国—いかにしてアメリカは

肥満大国となったのか』(バジリコ、2003年)では、人口の60%以上が肥満の国アメリカに誰がしたのか、について書いてある。あらゆる側面——階層、政治、文化、そして経済に踏み込み、アメリカが世界的な肥満国となった理由を解明している。カロリー摂取量と運動量の関係やダイエット法の嘘。多くの家庭にはびこる誤った知識や子どもの糖尿病の増加。さらには肥満と余暇、流行、宗教との関係も独自の視点で分析。「流行性肥満症」が人間、とくに幼い子どもの命を犠牲にしている恐ろしい現実を描き出している。

インドでも、経済成長にともなって、富裕層を中心に肥満や成人病の問題への意識が高まってきている。スポーツクラブなども都会でも見かけるようになった。インド人は、甘いお菓子を好む傾向がある。ベンガル地方にも、砂糖や蜂蜜をたっぷり使った甘いお菓子がある。辛いカレーを食べたあとには、甘いものがほしくなる。また、インドのミルクティー(チャイ)はたっぷり砂糖が入っている。太っていることは、豊かさの印でもあった。確かに貧しい人は、栄養が十分とれない上に、肉体労働をしている人が多く、たいてい痩せている。

—8 テロの不安。ワシントンのホワイトハウス資料館などへもペットボトルの水は持ち込めなかった。9・11のテロ事件から1年目の年でもあったので、テロへの警戒は厳しかった。

—9 2001年の9・11テロ事件の後、特に愛国心の高まりがあったとのことである。日本と比べて、国旗・国歌への尊重は明確であった。大リーグの試合においても、国歌斉唱が行われていた。

アメリカの第二の国歌といわれる「ゴッドブレスアメリカ」もいろいろなイベントで歌われていた。「アメリカに祝福あれ、我が愛する国よ、アメリカを守り、導きたもう、夜通し降り注ぎし天上の御光、山々を越え、平野を渡り、泡立つ海原へと。アメリカに主の祝福あれ、我が愛しの祖国よ」という歌詞である。

また、愛国歌とされる「アメリカ・ザ・ビューティフル」もよく歌われる。その歌詞は、「何と美しいのだ、広大な空よ、琥珀色に波打つ岩肌よ、荘厳な深紅の山々よ、果実をもたらす平原の上に！ アメリカ！ アメリカ！ 主は汝に恩恵を与えたもう。冠を頂きし同胞たちとの幸福、太平洋から大西洋へと広がりゆく……」である。

国歌の「星条旗」の歌詞は「おお、見えるだろうか、夜明けの薄明かりの中、城壁の上に雄雄しく翻る太き縞に輝く星々を我々は目にした。砲弾が赤く光りを放ち宙で炸裂する中、我等の旗は夜通し翻っていた。ああ、星条旗はまだたなびいているか？ 自由の地、勇者の故郷の上に！」であり、「ゴッドブレスアメリカ」と「アメリカ・ザ・ビューティフル」が神への信仰やアメリカの自然の美しさを歌っているのと違って、戦争にかかわっている。

インドの国歌は、タゴールの作詞・作曲によるものである。その歌詞は、インドの自然や各地方の名前を織り込んだもので、次のようである。「もろ人の心を動かしたまう方よ、勝利あれ。インドの運命の創造者よ！ パンジャーブ、シンド、グジャラート、マラーター、ドラヴィダ、オリッサ、ベンガル、ヴィンディヤ山脈、

ヒマラヤ山脈、ヤムナー河、ガンジス河、たぎり立つ海の波濤。すべては御身の吉祥なる名前により喚び覚まされ、御身の吉祥なる祝福を請い願ひ、御身の勝利の歌をうたう。もろ人に幸いを与えたまう方よ、勝利あれ、インドの運命の創造者よ！勝利あれ、勝利あれ、勝利あれ、勝利、勝利、勝利、勝利あれ！。「勝利」という言葉が繰り返されるように、国のために戦うことと、その戦いにおける勝利が歌われていると思われるが、それでも、全体としては、インドの多様な地域と自然、そして大いなる存在（神）への信仰が印象として残る。

—10 アメリカとインドの関係

アメリカは、第二期クリントン政権以降、対印緊密化政策をとっている。緊密化の最大要因は、相互の経済的誘因（貿易・投資・技術・市場）である。さらに、両国の外交的な思惑がある。アメリカのアジア外交で最大のポイントである対中国政策にインドを使いたいという狙いがある。インドは、かつての準同盟国であるソ連に代わる強力な友国としてアメリカとの関係を大事にしたい。このような情勢の中で、日本も、今までのように、インド、そして南アジアをあまり重視しないスタンスを見直さなければならない（スティーブン・フィリップ・コーエン著、堀本武功訳『アメリカはなぜインドに注目するのか——台頭する大国インド』明石書店、2003年、訳者あとがき、pp. 490-491 参照）。

—11 最近の日印関係

日本の外務省のホームページでは、次のように最近の日印関係についてまとめている。

「日印両国は1952年に国交を樹立。インド国内の強い親日感情にも支えられながら、友好関係を維持してきた。2000年8月の森総理訪印を契機として関係強化の機運が高まり、その後、2005年4月の小泉総理訪印、2006年12月のシン首相訪日、2007年8月の安倍総理訪印という毎年の首脳会談を通じて「戦略的グローバル・パートナーシップ」を確立し、着実に関係を強化してきた。2008年10月のシン首相訪日の際に、幅広い分野での協力を促進するための「戦略的グローバル・パートナーシップの前進に関する共同声明」及び安全保障分野での協力に関する「日印間の安全保障協力に関する共同宣言」を発出した。」

—12 私の恩師であり、タゴール研究の権威である我妻和男麗澤大学名誉教授のご尽力によって、タゴール国際大学で学んだ日本人やタゴールにゆかりのある方々、関係者が資金的に協力して、タゴール国際大学に「日本学院」の建物ができ、日本語の書籍の図書館も置かれ、同大学で日本語を学ぶ学生の教室として使用されている。また、同様に、コルカタには、「日印文化交流センター」が建設され、西ベンガル州政府が運営している。

* 竹内啓二 麗澤大学経済学部・同大学院国際経済研究科教授、(財)モラロジー研究所道徳科学研究センター人間学研究室室長。インド国立タゴール国際大学大学院博士課程修了、哲学博士。主な著書論文：『近代インド思想の源流—ラムモホン・ライの宗教・社会改革』（新評論、1991年）、「死別の悲しみの癒し」『癒しの思想』（麗澤大学出版会、2002年）所収、[翻訳]（共訳）マハトマ・ガンディー著『わたしにとっての宗教』（新評論、1991年）、[翻訳]リン・ア

ン・デスペルダール「デス・エデュケーションの使命—死を学び、感じ取ること」水野治太郎、日野原重明、アルフォンス・デーケン編著『おとなのいのちの教育』（河出書房新社、2006年）所収。